



学校だより

佐渡市立両津吉井小学校

平成29年12月 日

<12月号>

ほめてはいけない子？

～自信をもってチャレンジする子を育てる大人のかかわり～

校長 高橋 喜一郎

しつけや様々な教育活動が子どもの成長に効果を発揮するためには、子どもの自己肯定感、自信が土台にあることが必要です。自信があるからいろいろなことにチャレンジしてみようと前向きに取り組み、成長していくことができると考えています。

『子育てハッピーアドバイス』がベストセラーとなっている子育てカウンセラー・心療内科医である明橋大二さんは、著書『輝ける子』（1万年堂出版）の中で、多くの非行少年や犯罪少年は自己評価が極端に低いと言います。つまり自信がないということです。

自己評価には2段階あり、第1段階は、「存在に対する安心」、つまり、自分はここにいていいんだ、ありのままで存在価値があるんだという感覚であり、親が自分の存在を喜んでくれることで育まれる感覚です。第2段階は、「能力に対する自信」であり、周囲の人からほめられることによって育まれる感覚です。

「自信をつけさせるのに、『ほめて育てる』というのがあるが、自己評価が極端に低い子には逆効果である」そうです。「存在に対する安心」がある子どもは、自分の能力を問わず親にとって大切だという安心感があるから、期待に応えられなくても存在価値はなくなる。しかし、「存在に対する安心」が欠けている子をほめると、「ほめられることが自分の存在価値になり、ほめられなくなると存在価値を失うとを感じる、そして、ほめる人の役に立つことに力を入れ、自己主張したり反抗したりできなくなり、手のかからない聞き分けのよいい子になる。常にほめられ続けないと不安なため大変苦しく、息切れするとき深刻な危機が訪れる…」という問題を述べています。「1つ叱ったら3つほめる」といった、しつけに関わる方法も聞きますが、どの子も一律に叱ったりほめたりしてもダメで、その子を理解しその子に合わせたしつけがあるということなのでしょう。

明橋さんは、「存在に対する安心」が育まれない親子関係の理由として、①親からの否定（虐待、暴言、差別等）、②親子関係の希薄化（情緒の交流が希薄で甘えられない）、③親や祖父母の過干渉・過保護（先取り、お膳立て）を挙げています。また、「存在に対する安心」を育むポイントとして、次の3点を挙げています。

- ①話を聞く…相手の気持ちを受け止める 自分より相手が話している時間を長く
真剣に聞くことは「あなたは大切な存在だよ」と伝えること
- ②がんばりを認めてねぎらう…「がんばれ」ではなく「がんばってるね」
- ③「ありがとう」を伝える…自分でも何か人の役に立てるのかと嬉しくなる

私たち大人が、子どもにしっかりと向き合い理解を深め、マニュアルではなくその子に応じた本気のかかわりをしていくことが大切なのだと思います。